

本居宣長の『在京日記』にみる行楽地としての東山景域*

Higashiyama Landscape Area as the Excursion Territory seen in the Diary of Norinaga Motoori*

出村嘉史**・大住由布子***・川崎雅史**・樋口忠彦****

By Yoshifumi DEMURA**・Yuko OSUMI***・Masashi KAWASAKI**・Tadahiko HIGUCHI****

1. 研究の背景と目的

社会資本整備の量的充足のために邁進してきた国土行政は、転換期を迎え、昨年6月に景観法が制定されたように、良質な景観、すなわち「潤いのある豊かな生活環境」の創造を支援する段階になった。そこで、それぞれの地域の風土性に従って、良好な景観のあり方を求める必然性が出てきた。風土性が現れる経験的な空間は、物理的な領域の情報として考察することができると考えられる。このような、景観として把握される空間的な領域を景域と呼ぶことにする。事例において、良質な景域はどのように形成されているのかを把握する必要がある。

清水寺・高台寺・八坂神社の並ぶ地域(図1)は、現在も京都の主要な観光エリアである。この山辺に広がる領域は、産寧坂伝統的建造物群保存地区や石塀小路地区などの、特に近年、歩行者を中心とした街並み保存・修景に取り組まれた地区を含んでおり、山辺に並ぶ名所の間で、複数の経路がネットワークをなし、広い領域を自由に往来する散策を楽しむことのできる場所になっている。安永9年(1780)に『都名所図会』に始まり次々と出版された近世の名所図会や案内記には、ここが近世においても賑わいを見せる行楽地として成熟していたことを示されている。このように描かれ始める頃の、この地域は、実際当時にはどのような空間として体験されていたのであろうか。

本論は、18世紀中葉におけるこの地域の景域を、本居宣長という人の目を通して確認し、後に多くの名所図会で紹介され現在に続く行楽地の景域における要素の構成を明らかにすることを目的とする。

本論に関連する先行研究としては、近世の名所に着目したもの¹⁾が、これまでに多くある。しかしながら、東山の景域のように、幾つかの名所が複合的に構成される状態を捉え、本居宣長のような個人の日記に着目して、その時代の景観像を探ろうとした研究は、管見ではこれまでにない。

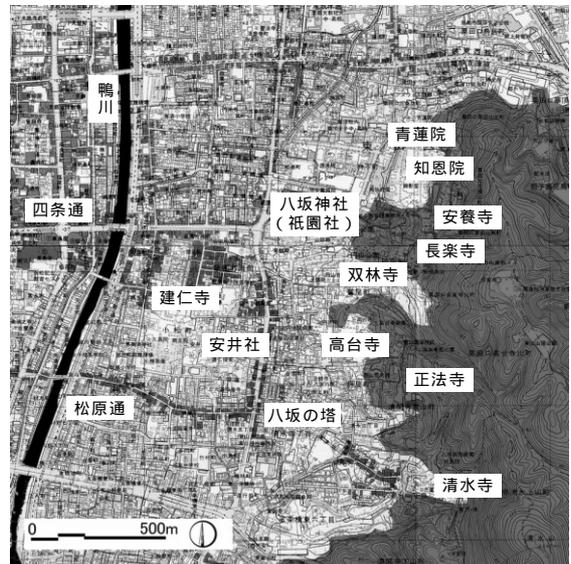


図1 現在の対象地域(祇園-清水)

2. 18世紀中葉の祇園社周辺における敷地構成

景域を把握する背景として、18世紀中葉の東山山辺は、どのような敷地で構成されていたのかを明らかにする。当時の東山一帯では、寺社の領域が隣り合いながら、その大部分を占めていた。社寺境内は、近世初期の東山の社寺建設ブーム以後、幕府による寺領の安堵や修復を背景に復興し、江戸中期までには安定した社寺領域を誇っていた²⁾。それ以降は、ほぼ一定の敷地を基盤に繁栄したとすると、近代初期の社寺境内の資料から旧社寺境内地を特定することができる。そこで、明治維新後の「社寺境内外区別取調図³⁾」から境内地を判断し、平面図化した。等高線は、近世以降昭和初期まで、目立って大きな地形改変の事実がないと判断し、大正11年に測量された地形図のデータを用いた。

*キーワード：景域，近世，東山，本居宣長，名所

**正会員，博(工)，京都大学大学院工学研究科

(京都市左京区吉田本町 TEL:075-753-5123

e-mail:demu@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp)

***学生会員，修士課程，京都大学大学院工学研究科

****正会員，工博，京都大学大学院工学研究科

社寺の敷地を含めた東山山辺の敷地構成は、18世紀中葉までに描かれた複数の地図⁴⁾と文献から明らかにした。構成の平面図は、近代の測量によって作成された地図をベースにし、特に経路については、18世紀頃の地図から位相幾何学的な関係を抽出して修正し、作成した。対象とする1750年代は、特に八坂地域で新地開発の進められた時期であるため、新地（社寺門前が規模を拡大して出来た新たな市街地）の成立時期について、各種文献により把握した。

その結果は図2のようなになる。社寺境内は、広い山辺の中で互いに接して隣り合っていた。境内を通る経路は、隣接する他の社寺の敷地へ直接つながるものは殆ど見出せないが、社寺間の門前は極めて近接していたことが分かる。周遊する景域を体験する現場となる道は、境内の外においては、門前町の道か野の道であったと考えられる。これをもとに、本居宣長の体験した景域を分析する。

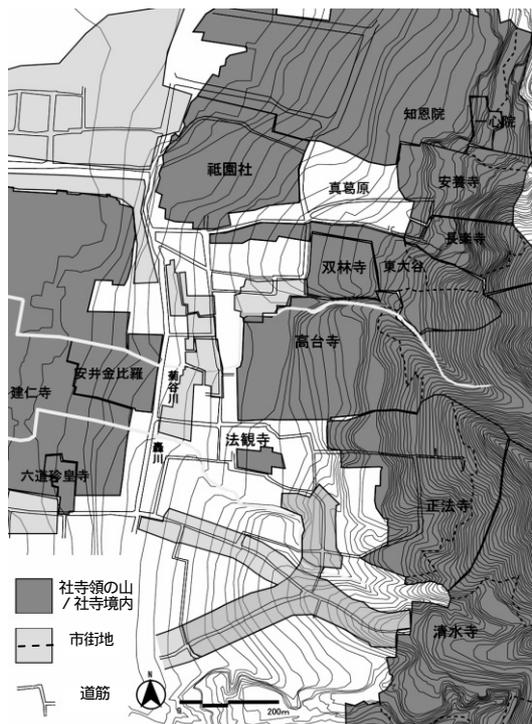


図2 18世紀中葉の社寺敷地と門前の道構成

3. 本居宣長の周遊行動

3.1 本居宣長『在京日記』

近世における名所案内記の多くが、机上で仮想的に京都を巡覧する目的や、巡覧の際の案内として携帯する目的であった⁵⁾のとは異なり、『在京日記』は、宣長本人の実際の行動の記録であり、さらに観察者として周囲の人々の行楽の様子も詳細に記述さ

れ、資料から読みとることの出来る空間の具体性は非常に高い。寶曆2年から同7年（1751-1757）が宣長の京都遊学時代であり、日記は寶曆2年3月5日から始まる。当初約4年間は、漢文記録体で、風景や行動の記録は殆どされていないが、寶曆6年正月5日の記事以後、和文体に形式が変更され、宣長自身の行動や感性に従った詳細な記述がされている。寶曆7年10月6日まで続くこの2年間の記録から、当時の場所における愉しみや、場所と直接関係する行楽の構成を明らかにすることができる。『在京日記』に記述される、本居宣長の清水祇園辺りを含む行楽の内容は、表1のとおりである。

例えば、寶曆七年丁丑八月六日の日記は、高台寺の萩見へ出かけた記述であり、以下のような内容が記されている。未の時（午後2時頃）から知人と3人で出かけた。歩いた経路は、（綾小路室町の住処から）四条河原を過ぎ、祇園町を通り、祇園社の手前で南へ曲がり、八坂の塔の前を過ぎて東へ上り、まず正法寺へ足を運んでいる。そこから北道を戻り、高台寺の南の門から境内へ入り、茶店の床几で萩見をしていたが、雨が降り始めて、四条通を軒伝いに戻った。前述の作成した当時の敷地図の上で確認すれば図3のようなになる。この間に、愉しみの対象としては、「正法寺へ至る石段と周辺の塔頭（この情景を題材に一句ずつ続けて漢詩を詠んでいる）」、「正法寺の本尊」、「正法寺からの絶景」、「正法寺本堂の茶・たばこのもてなし」、「高台寺の萩の花」、「高台寺境内の茶店の床几」が挙げられる。

また、寶曆六年二月二十三日の日記には、行程は詳らかでないが、「清水きをんのあたり（清水祇園の辺り）まうて侍る」と記されており、祇園社から清水寺に至る、高台寺、八坂の塔などを含む一帯をひとまとまりに捉えていることを示している。

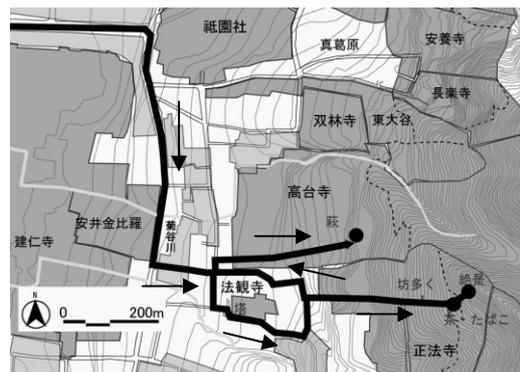


図3 寶曆七年八月六日の行楽行程

表1 『在京日記』における清水祇園辺に関する記述

日付	行程(景物・行為)	備考
1756.2.24	[けふは知恩院へまいらはや] 祇園町 知恩院御影堂 南の門 祇園林 二軒茶屋(物くひ) 祇園社(物まね) 四条の端のほとり	御忌 物まね:米澤彦八は都に名高き '例の青楼,勤められる
1756.3.23	[清水きをんのあたり]	いとららかなる空・こよなう春めきてあたたか
1756.4.7	[東山長楽寺の花見]	花は今をさかり
1756.4.19	[東山の花見]知恩院 馬場(青葉) 山門前・鐘楼辺・方丈辺(桜桃盛・紅梅彼岸桜残る) 長楽寺丸山のあたり(花・盛に見やられたり) 双林寺 西行庵(西行像) 高台寺 天神の傍(花盛ちかく・歌よむ)	西行像:頼阿法師作・西行庵:いと風流ならぬ所也 天神の花:吉野を連想
1756.4.23	[高台寺の春光院にて花見]高台寺天神の傍(類希なめでたき花) 双林寺神明社前(麗しき花・歌詠む・西行などの墓) 春光院(物くひ酒のみ・花) 夕:山へ登りて木の下(酒のみ)	高台寺・双林寺の花見比べ 景山先生歌多くよみ給へる
1756.5.8	[清水へまうて待る]清水(まつり・御輿) 大佛(杜若;まだ) 三十三間堂辺高屋(酒) 帰宅 檀王法林寺(萬日主夜神開帳) 夕:祇園社 祇園すはま屋(酒)	花つみ・地主権現のまつりにて御輿も門へ出おはします
1756.7.24	[長川子の月次の會]丸山の也阿彌 河原(見る)	丸山のあたり、いつれも西向きにて、夕日がけ暑けれども、広ければさすがに涼しかりし
1757.1.31	[削りかけて、祇園へ人々詣て待る、予も]祇園社 境内(神人・はだかの行者) 西門石段 四奈(乞食・火焼・賑わい・悪口言いあい)	四奈通:西門から万里小路、高倉あたりまで、両側道の辺に乞食火をともし、座をしめて
1757.2.9	[けふなん祇園へまうて待る]祇園社境内(能、物まねやうの者) 安井(茶店) 二軒茶屋(物くひ酒のみ) 日暮れ:帰宅	いとさむき日 九日十日は安井金比羅・青楼娼妓の類のとりわき信仰し
1757.4.3	[高台寺の春光院にて花見]高台寺 春光院(花) 天神の前(水茶屋の床几:酒のみ乾飯い:花)	人おほく出侍る、中屋娘など携えて騒ぎ歩く人も多い
1757.4.4	[東山のわたり花見]牛の時過:家 知恩院 古門 山上(花)、方丈のわたり(ことうるわしき桜)、桜の馬場、山上(たばこ茶のみ) 山門 双林寺境内(桜、水茶屋) ある坊 西行が庵 南の門 丹波屋が新宅 不明	
1757.4.25	[今春某か十七回忌の追善のはやし]双林寺 林阿弥(はやとくはてぬ、内へ率いれて酒など動む、酒) 二軒茶屋(物くひ)	かのはやしの人々も、跡よりひとつ所へきて酒のみ騒ぐ、けふ二軒茶屋いと賑はし
1757.5.10	[金毘羅の縁日]安井(杜若はようつりかけ・藤はあとなし)池の辺の水茶屋(杜若、人の行き来・妓) かへさ:二軒茶屋(物くひ) 西石垣(見舞)	妓:新地宮川町などの妓 二軒茶屋いと賑はし
1757.7.18	[みこしあらひのねり物見]八時過:家 四奈通 藪の下 祇園林 二軒茶屋(床几多く、酒のみ、ねりものわたり) 下河原(茶店あきたる所なし、紙細工の屋形など多く) くれかた:祇園町 芝居の前 新地の方、縄手、福島屋・楼(とかくする) 河原:床几(河原のけしき・賑わい:酒のみ物くひ・涼む) 不明	東へ東へとゆく人引きも切らず夥し 二軒茶屋でねりものを待つ 四奈通:通るへうもなし
1757.8.9	[六道まいり]夜:四条を東へ 祇園町藪の下 安井の御前 松原通 西へ (高野まきという木) 六道の門の前 六波羅蜜寺(前)、をたきの寺(前) 建仁寺町上へ 四奈	四奈:いと多く人のでること 松原:清水へは諦める、群衆に押し潰される 六道:あまりに人の多く、小野童の像 建仁寺町の道:よきほどに賑はし
1757.8.18	[清水へまふて待る]松原を東へ 川原の橋をわたり 清水寺 本堂の様 佛 舞台へ(四方のけしき、所々の風景) 瀧山寺の前 奥の院(四方のけしき)、本堂(六斎:笛太鼓鉦鼓) 塔のほとりの茶店 八坂下河原 四奈 日暮れ過:帰宅	清水舞台四方のけしき:男山崎のわたり、淀川の流れ、奥の院の後ろの山:いと物深くしけりて神さびたるさま 奥の院四方のけしき:本堂、舞台のけしき、見下ろしたる音羽の瀧のわたり、石の登りはし、人の上り下り
1757.9.6	[高台寺の萩見]四奈川原 祇園町 藪の下 八坂の塔の前 やや東より細道 山へ 石段など登るほどいと遠し(歌よむ) 坊など多く 正法寺 本堂(都の内いとよく目の下、鴨川の流れ、三條五條の橋、二条城、松原通り、遠近、かけつくり、大きな檜) 東へ上る廊下 上の堂(天照大神) 本堂(僧:茶のませ、たばこ盆出し) 高台寺 南の門 山上(萩の花、茶店の床几) 雨:祇園町 軒伝い 寺町四奈下儿町、知る人	高台寺ばかりは興なからんとて霊山へ登る 正法寺石段:五絶の詩 高台寺茶店床几:本庄七郎という人、また何某とかよういう人と二人出来り、1つところに休む
1757.9.15	[月見にいつ]四奈を東へ祇園町 安井前(茶店床几、くもり、月なし) 下河原(座敷は賑はし、月なし) 帰宅(月あぼろ)	安井まえ:家たち続き、月見るべき所もなければ、昔の名残とて、御門前には茶店多く、床几出して 下河原:いづこも寂し、座敷は、いづこもいづこ賑わしく見ゆ
1757.9.17	[によひは月見にゆかんと]申の時過:ゆく 祇園社 ここかしこありき 西石垣の生簀、二階(東山際と月、物くひ、知恩院丸山の上的わたり、松の梢の月中に映りたる、酒のみ)	さてマツほどに、マツの梢より出る月影、いはんかたなくさやけし
1757.10.13	[くれかたより月見にいつ]四奈を東へ 祇園社 安井前 下河原など道逢しありく 不明	

3.2 行楽の拠点の種類と場所

本居宣長が清水祇園辺へ出向いた目的は、それぞれ表中【 】で示したように、社寺参詣、社寺の催し(縁日・御輿など)、花見、萩見、月見、月次会などである。しかし、それらの内容は、単一目的であることは殆どなく、各種の行楽が含まれている。そこで、全行程において行楽の拠点であった場所として、歩みを止めて何らかの行為をしたことが確認できる場所(表1の)に着目する。これらは実に全事例において「物食い」「酒飲み」といった飲食を伴う場所であり、清水祇園辺の広い領域の中には、積極的にこの種の場所が提供されていたことが分かる。これらを総称して「装置」と呼ぶとすると、以下のようなものが見出される。

第1に、社寺境内の季節の風物周辺には、仮設的な茶店・水茶屋の床几が並べられた。空間的構成として、例えば『花洛名勝図会』(1864)に描かれている高台寺の萩見の様子は、宣長の萩見の記述と矛

盾がない(図4)。祇園社の二軒茶屋は、これが場所に定着したものであり、季節に関わりなく賑わった。中でも「御輿洗い」のねりもの見物の際には、床几を多く並べて参加した。この様子は、『都林泉名勝図会』(1799)に描かれた内容と一致する(図5)。また月見には、閑散とした野に床几を並べて、山と重なる月の姿を愉しむために、山から退きをとった山麓部である新更科が好まれていたことが読みとれるが、寶暦5年(1755)の新町形成にともない、街路の中に床几を並べる行為だけが残った。



図4 高台寺萩見の風景



図5 御輿洗い見物の二軒茶屋



図6 清水寺における眺望の視点場

第2に、塔頭が場を提供する場合もあった。この場合、西行庵のように、その塔頭自身に謂われがあり見るべき対象であった。さらに、正法寺については、寺の本堂の僧が参拝者に酒・たばこを振る舞うことも当然の事として記述されている。特に、正法寺や清水寺や安養寺のような高台に位置する寺院では、眺望を1つの名所として、その添えとしての飲食が求められていた(図6)。

(4) 行楽の経路に関する分析

東山における四季の行楽の経路と行楽の拠点を、当時の地図から把握すれば図7のようになる。ルートに記した太線が実際に辿った経路であり、通った頻度を太さで表している。これから以下のことが把握できる。

東山の景域(清水祇園辺)へのアクセスは、四条通・松原通の二つの軒並みの続く街路に限られており、特に四条通が頻繁に用いられている。隣接する境内を直接渡る経路はなく、たとえ隣接する社寺境内を移動する際にも、一旦、門などを経て門前にある道を用いている。こうして境内外を渡り歩く過程において、風物を観察し、歌を詠むなどの行為をしている。

境内や街路の茶店・床几・水茶屋における「物食い」「酒のみ」が、行楽の行動の中で重要な拠点となっている。ただし、これらは仮設的な

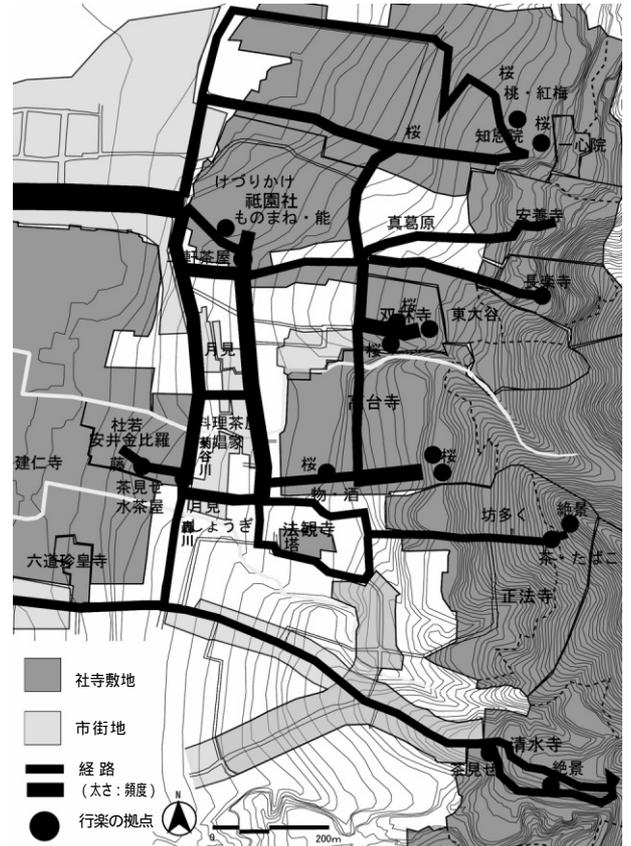


図7 東山景域の経路往来頻度と行楽の拠点

ものであり、四季にあわせて設置されている。

4. 結語

以上のように、本居宣長という個人の目を借りて、門前に新町が形成されはじめる18世紀中葉の東山における、行楽の空間の有様を把握することができた。すなわち、本居宣長によって描かれた風景は、後に幾つかの名所図会によって描かれることになる社寺周辺の構成にほぼ一致しており、この空間の中で具体的に行動する人々の姿が把握できた。こうした行動の場所は、周遊する主体の経験の中で、「清水ぎをんあたり」と一口に把握されるような景域として成り立っていたといえるだろう。

1) 例えば「江戸の四季の名所について」(樋口忠彦ら, 1981, 日本都市計画学会学術研究発表会, pp.379-384), 「都市と名所の形成 - 京都を素材として」(高橋康夫, 1982, 季刊自然と文化 27, pp.4-11), 「17世紀の名所案内記にみえる大阪の名所観」(上杉和央, 2004, 地理学評論 77-9, pp.589-608), 「江戸の名所の成立・成熟過程に関する研究」(羽生冬佳, 2004, 都市計画論文集 39-3, pp.115-120) など
 2) 京都市編『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』(平凡社, 1987) pp.37-47
 3) 社寺境内外区別取調図
 4) 「元禄十四年実測図」1701, 「京都明細大絵図」1714-1721, 「増撰再版京大絵図」1741, 「京都細見之図」1779
 5) 菅井聡子「近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識」(日本建築学会計画系論文集 第579号, 2004.5, pp.163-170)